



出逢い

ねえ、お日様。あの☆の瞳^{ほし ひとみ}はいつになったら私たちのアイに気づくのでしょうか？あの☆の色々は私とあなたの光で輝いていることに、あの☆の瞳はいつか気づいてくれるのでしょうか？

ねえ、お日様、私はあなたをアイしています。あなたの大切な宝であるあの☆を私はずっと見えています。大好きなあなたの宝を私も大切に守りたいのです。あなたの光をあの☆に届けることで、あなたのお役にたっていることが私はとても嬉しいのです。あなたの光のおかげで、あの☆の瞳に私を知ってもらうことができるのです。大切なあなたの大切な宝を、共に大切にできる自分を、とても大切に感じます。

私はずっとあの☆を見えています。あの☆の色々を感じています。色々ななかの一つに木があります。あの☆には色々な木がありますが、ある山の入り口に立っている木を知っていますか？私が彼女に気づいたのはもうずっと昔のことです。彼女はいつも一人でそこにいて、私を見上げていました。ほら、また彼女の声が聴こえてきます。

．．．．．

ああ、お月様、私はひとりぼっちです。私はずっとここにいます。私はずっと昔からココにいて、あの山を見えています。あの山しかないのですから、あの山を見るしかないのです。山にはたくさんの木々が一緒に群がっています。彼らはいつも一緒に葉をゆらしたり、一緒に花を咲かしたり、一緒に実をつけたりして、なんだか皆で楽しそうにしています。私のそばには誰もいません。ずっと一人で彼女を見えています。ずっと。ずっと。ああ、お月様、私はさみしい、ひとりぼっちの木です。

．．．．．

彼女は私を見上げてはため息をついていました。ため息は灰色の雲をよび、山には雨が降り始めました。雨は天から山へとダイブしていきます。そして彼女のもとにも雨粒が飛び込みました。

．．．．．

彼女はいつもあそこにいる。あのたくさんの木々のある山のふもとに、彼女は一人で堂々と立っている。天から地へと行くとき、いつも彼女はあそこにくれる。彼女のおかげで、僕は自分の位置がよく分かるんだ。彼女があそこにくれるのおかげで、僕は迷うことなく地へと飛び込むことができるんだ。僕は何度も彼女を通りすぎている。彼女はいつも遠くを見ているようだった。僕は水。僕のことを人々は雨と呼ぶ。今日も、僕は彼女のもとへダイブした。

雲の切れ間から時折お月様が彼女を照らし、彼女の葉はいつにも増して美しく輝いていた。僕は、勇気を出して、初めて彼女に声をかけてみることにした。

「こんばんは。」

．．．．．

私は、お月様をみて泣いていました。うす黒い雲におおわれそうになる、お月様をみて、泣いていました。しのびよる雲はなんだか私のさみしさを表しているかのようで、お月様をみて、泣いていました。あの一人ぼっちのお月様のように、一人ぼっちの私はさみしい気持ちがあふれて

泣いていました。

ポツ ポツ と、ささやかな水が頬にあたりました。それは天からやってきた雨つぶでした。私の涙のように、ポツ ポツ と、ほほにあたっては流れていきました。

ポツ ポツ . . .

ポツ ポツ . . . と。

「こん . . . ばん . . . は。」と、そう、^き聴こえました。

「 . . . だれ? 」

「こん . . . ばん . . . は、僕は水です。天から降りてきた雨です。」

私は驚きました。水が話せるとは思っていなかったのです。これまで水が話すのを見たことがなかったので。

「こんばんは . . . はじめまして。」

「こん . . . ばん . . . は、初めて声をかけるけど、僕はあなたのことをずっと前から見ていたんだ。」

「私のことを? ずっと? 」

「ああ。ずっと。僕はあなたを見て、いつも、あなたをめぐって降りていたんだから。」

「雨は何度も降っているけれど、いつも私をとおり過ぎてゆくばかりだったわ。」

「ああ。僕は、何度もあなたを過ぎて、また地から天へ帰り、そして、またあなたのもとにやってきていたんだ。僕は、いつもあなたのところに降りていた。山のたくさんの木々のようには群れずに、堂々と一人で立っているあなたにひかれて、降りていたんだ。あなたがいてくれるおかげで、ココに来ることができたんだ。」

「私の . . . おかげ . . . ? 」

「ええ。あなたのおかげ。ずっと、ありがとう。」

.

私は雲の切れ間から、あの二人の話を聴いていました。水に出会った木の顔は、だんだん明るい表情になっていきました。二人が恋に落ちるのに時間はいらないうでした。言葉を交わしたそのときから、二人はお互いに愛を感じたようでした。二人は、ずっと笑顔でした。さっきまで泣いていた木は、とても美しく輝いていました。私の光をあびた彼女は、とても楽しく笑っているかのようでした。

私はこの二人の恋の行く末を見守ることにしました。

「あなたは色々なところに行けて、自由でいいわね。」

木はうらやましそうに言いました。

「私の知らない色々な場所の色々なものが見れるもの。私はずっとここから離れられないの。ここにいないといけないの。私も自由に動けるようになりたいわ。」

「僕は、天と地をずっと移動しなければならないんだよ。一所にずっと留まることはできないんだ。めぐってくることはできるけどね。僕はずっとあなたとココにいたくても、それは出来ないんだよ。あなたはずっとココにいることができるんだよ。少しずつ変わっていくあの山の色々を見れるだろう。変わらないことで、変わっていくものを感じることもできるんじゃないかな。」

「私は、ずっと一人で寂しかったけれど、そんな私をあなたはずっと見てくれていたのよね。ずっとココにいないてはいけないと思っていたけれど、ココにいられたことであなたの役に立っていたのよね。あの山だけを見るしかないと思っていたけれど、そうね、いつも山は少しずつ違う色々を見せてくれていたわ。山の色々を私は誰よりも知っているんだわ。ありがとう、ありがとう、私はあなたのおかげでこれまでの自分も好きになれたわ。ありがとう。」

「ううん、君がさみしいと感じていたことに僕は気づけなかった。他の木々とはちがって君だけは一人であることに、僕は君を勇ましく感じていたんだよ。分かってあげれてなくて、ごめんね。それに、僕はね、ずっと動かなければ・・・と思っていたんだ。もっと休みたいのに、ずっと止まりたいのに・・・と思っていたんだ。けれど、君のおかげで動ける自由を楽しめばいいってことに気がついたよ。君に逢うまでに色々な場所の色々を感じよう。そしたら、次に君に逢うときに、君に色々を聴いてもらえる。ありがとう、ありがとう、僕は君のおかげでこれからの自分も好きになれるよ。ありがとう。」

今の自分も、これまでの自分も、これからの自分も、全部大切な自分であること、しなければいけないのではなく、できることを楽しむ、そのことに二人はお互いに気づけたようでした。

「水よ、私はあなたが好きです。私はあなたと共にいたい。」

「木よ、僕もあなたが好きです。僕もあなたと共にいたい・・・。」

二人は共に、「共にいたい」と願いました。そして、その願いをかなえるため、二人は山の神様を呼びました。

「山の神様、山の神様・・・。どうかお願いします。私たちの願いをかなえてください。」

すると、二人のもとに、山から光が舞い降りました。その光は私の光に照らされて、虹色に輝いています。どうやら、その虹色の光が山の神のようでした。山の神は輝く姿と同じように、輝く声をあたりにひびかせました。その声は私のもとにもひびき、あの☆すべてにひびいているかのようでした。

「私は山の神。この山の全ての恵をつかさどる神。」

木は言いました。

「山の神様、お願いします。どうか水との結婚を認めてください。私はずっとあなたの入り口を守ってきました。あなたの色々を見守ってきました。私はずっと一人で見守ってきたと思って

いたけれど、彼と一緒にいてくれたことに今やっと気づけたのです。水と共にいさせてください。これからもあなたを見続けていきますから、どうか、お願いします。」

水も言いました。

「山の神様、僕からもお願いします。どうか木との結婚を認めてください。」

すると、山の神の声が光の煌きとともに聴こえてきました。

「木よ水よ、あなたたちの願い、聴きいれましょう。けれど、三つの約束をしてほしいのです。約束を守ることを誓うのであれば、結婚を認めましょう。」

二人は黙ったままお互いに見つめあい、うなずきました。

「水よ、あなたは天と地をわたり歩くものです。このことは誰にも変えられないのです。満月の夜に地に降り、その次の新月の夜までには、必ず、天に帰ると約束してください。それが一つ目の約束です。」

「わかりました。必ず、天に戻ります。」

水はそういうと深くうなずきました。

「二つ目と三つ目の約束は、木よ、あなたへのお願いです。二人の結婚のお祝いに、私から三つの宝をあなたに贈ります。新月の夜ごとに、宝を一つずつあなたのもとに贈ります。木よ、私の大切な宝を、あなたの愛で包んでください。慈しみ愛することを約束してほしいのです。それが二つ目の約束です。そして、三つ目の約束は、全ての宝を授けた後、木よ、あなたの実りを私に捧げてください。約束を守ることで、あなたたちはずっと共にいることができるでしょう。」

木は

「約束を守ります。ちかいます。」

と、山の神に答えました。その言葉を聴いた山の神はその光で木と水を包み込み、キラキラと虹色に輝きを増したかと思うと、次の瞬間、スーッと山に消えていきました。それは、まるで二人の結婚を「おめでとう」と祝っているかのように見えました。

私はますます、これからの二人を見るのが楽しみになりました。山の神との約束は三つ。

- ・ 満月の夜、水は地に降り、次の新月の夜までには、天にかえること。
- ・ 新月の夜、山の神の宝が一つずつ木のもとに現れる。あわせて三つの宝を木は大切にすること。
- ・ 三つの宝を授かった後、木の実りを山にささげること

山の神の宝とは何なのか？気になるところですが、私が地からは見えなくなってしまう新月の夜のことですから、私は宝を見れないかもしれません。

一つ目の宝

水との楽しい日々が過ぎ、最初の新月の夜がやってきました。

その日の夕暮れ、私は水を見送りました。離れ離れになるのは寂しいけれど、これまではただ通り過ぎていたと思っていた雨が、いつも同じ水だったと知れたことで雨を待つ喜びを感じます。彼は私の知らない世界をたくさん教えてくれました。

彼は、

「次に逢うときまでに、また楽しい色々を見てくるよ。」

と言っていましたから、とても楽しみです。

とても静かな夜でした。お月様はどこにも見えず、真っ暗な夜でした。真っ黒な空に無数の白い星がまたたき、ぼんやりと明かりをとどけて、辺りの気配を伝えてくれます。宝がどんな宝なのか、全く知らされていないので、私はいつにも増して辺りに目を凝らし、耳をすまし、心を研ぎ澄ましていました。

ひらひらり

確かに今、何かを感じました。何かがやってきました。何かが私のそばで飛んでいます。

ふわふわり

真っ黒ななかに真っ黒な何かが動きます。私のそばで、小さく空気がゆれうごきます。じっと目を凝らしてみると・・・どうやらそれは、真っ黒な羽の・・・蝶のようでした。私は不思議に思いました。色々な色をもつ山の神の「宝」ともあれば、とても美しい鮮やかなモノだと思い込んでいたのです。

「こんばんは。」

「こんばんは。」

「僕は蝶。山の神様にあなたと共に眠るように言われ、やって来ました。ここで一晩休ませてください。」

「私は木です。あなたが山の神様の宝物なの？」

「さあ・・・僕は山の神様じゃないから分かんないけど。僕は山の神様は大好き。僕を抱きしめてくれるんだ。」と、真っ黒な羽の蝶は無邪気に言いました。

私は「一晩だけなら・・・」と、その蝶を私の花に休ませてあげることになりました。花びらでそっと包むと、真っ黒な蝶は安心したかのように眠りました。

すー・・・すー・・・

静かな静かな夜でしたので、蝶の寝息がひびいていました。花びらを伝って、私の全身に、蝶の呼吸が伝わってきました。私はそーっとそーっと優しく包みました。蝶を起こさないように気をつかいはしましたが、一人で寝ているときよりも、その寝息は、私に安らぎを与えてくれました。

朝になり、お日様の光が差し込み始めると・・・

「おはよう。」蝶の声で私は目を覚ましました。いつの間にか寝ていたようです。

私の目の前には、とても美しく鮮やかな蝶がいました。

キラキラリ

キラキラ輝く蝶が私の前に飛んでいました。

「ありがとう。あなたのおかげで、ゆっくり休むことができました。これで、また山に帰ることができます。」と、その美しく鮮やかな蝶は言いました。

驚いて、その蝶をよく見てみると、羽は透明でした。真っ黒な羽は、真っ暗な夜のせいでそう見えていただけだったのです。お日様の光をあびた蝶は、キラキラと虹色に輝き、この世のものとは思えないほどに美しい光を放っていました。

「ありがとう。山の神様に抱きしめてもらったときみたいに、気持ちよかったよ。お礼に・・・」と、蝶は私の花にチュッとキッスをしてくれました。

「私もあなたのおかげで安らげたわ。ありがとう。」

蝶はキラキラ輝きながら、山に帰っていきました。それは、本当に美しい宝でした。私は、「もう少し一緒にいたかったな・・・」と思いました。

.....

次に私が木を見たときには、もう山の神の宝らしきモノは見当たりませんでした。私はてっきり水と離れたことで、また彼女は寂しがるかと思いましたが、なぜか彼女は安らいだ表情でいました。きっと宝のおかげなのだと、ますます宝が何だったのか気になりましたが、それはすぐに私にも知ることができました。私がまあく満ちた日、水がまた彼女のもとを訪れました。彼女は久しぶりに逢った水にとっても嬉しそうに話し始めました。

「蝶がきたのよ。とても美しい可愛らしい蝶だったわ。」

「へえ、宝は、蝶だったの？」

「ええ、私ね、最初、真っ黒な羽の蝶だと思っていたのよ。山の神様の宝なのになんで真っ黒なの？って思ってしまったの。けれど、次の日の朝、その羽は透明だったって分かったの。夜の闇のせいで真っ黒に見えていたのね。透明の羽の蝶はお日様の光をあびて、とても美しく輝いていたわ。あなたにも見せてあげたかった。それはそれは本当に美しい宝だったのよ。」

嬉しそうに話しつつける彼女をみて、宝はとても美しかったのだろうと想像はできました。水は彼女の言葉ひとつひとつに嬉しそうにうなずいて聴きっていました。私もそうでした。こんなに嬉しそうな表情の彼女をみるのは初めてでしたから、私もなんだか嬉しくなりました。

.....

「僕も君に話したいことがあるんだ。あのね・・・」

僕は彼女のもとを離れてからの色々を話した。なかでも彼女が目を見開いて聴き入れてくれたのは、彼女の知らない海の話だった。

「僕たち水は雨として地におりるときは自分で決めて降りてるんだ。だから、僕はいつも君のもとに降りていたんだよ。ふふふ・・・。地に降りた後、僕で言えば君を通り過ぎ後だね、・・・少しずつくっついていくことで、僕はとても大きくなっていく。もっとも大きくなれる場所、それが海なんだよ。海は大きな大きな僕なんだ。君の目には僕は透明に見えるだろう。けれど、海の僕は不思議なんだ。透明な僕は海では青に見えたり、エメラルドに見えたり。僕自身は何も変わってないけれど、なぜか映る色は変わっていくんだよ。君は透明な羽の蝶を真っ黒な羽だと思っ

たと言ったね。同じように海の僕は夜の闇では真っ黒に見えることもある。そして、お日様の光をあびると黄金に輝いて見える。いつか君にも僕の色々を見せてあげたいな。」

・・・・・・・・

木も水も、お互いの言葉ひとつひとつにうなずき、お互いに幸せを感じあっているかのようでした。水は玉となり、木の花をスルスルと飛び跳ね、二人で笑いあっていました。私はそんな二人を微笑ましく見ていました。

二人でいられる日々があっという間にすぎ、また離れる日になりました。二つ目の宝のことを気にしながら、私はお休みすることにします。

二つ目の宝

真っ暗な夜でした。水も天に帰ったので、とても静かでした。無数の白い点が空に瞬いています。私はワクワクしていました。二つ目の宝が何なのか？ワクワクしながら待っていました。一つ目の宝に安らぎをもらえたので、私は二つ目の宝もとても美しく愛らしいものだと思っていました。

目を凝らし、耳をすまし、心を研ぎ澄まして待ちました。

サー．．．サー．．．

それは、山のほうから、せわしく飛んできました。

それは、冷たく吹き荒れる風でした。

「こんばんは。あんたが木？山の神がね、あんたと一晩おしゃべりしてこいって。あ、俺は風ね。あのね．．．」と、風は早口で言いました。私が挨拶するすきもなく、風はしゃべりつづけます。私は「なんだか失礼ね．．．」と不快に思いました。「蝶のときはとても安らげたのに．．．」とも思いました。が、山の神との約束を思い「一晩だけだし」と、真っ黒な風のおしゃべりに仕方なく付き合うことにしました。

風は休むことなく走り回り、しゃべりつづけます。はじめは気乗りしなかったのですが、だんだんに風とのおしゃべりが楽しくなってきました。風は私の葉や枝をくすぐり、風に身をまかせると、おかしくておかしくて、私は身をゆらしながら大笑いしました。私は風と共に笑い、共に歌い、共に踊り．．．大騒ぎして、いつの間にか眠りについたようでした。

朝になり、お日様の光りが差し込み．．．

「おはよう。」風の声で私は目を覚ましました。

目の前には、キラキラ輝く風がいました。

「ありがとう。笑った笑った！すごい楽しかったよ。お礼に．．．」と、風は、私を優しく抱きしめてくれました。

「私もあなたのおかげで大笑いできたわ。ありがとう。」

出逢ったときは冷たく吹き荒れていると思っていた風でしたが、お日様の光をあびた風は、暖かく穏やかでした。私は虹色に輝く風に抱きしめられ、私自身もキラキラ輝き、風のぬくもりで身も心もあたたかくなりました。キラキラ輝きながら風は山に帰っていきました。それは、本当に美しい宝でした。私は、「もう少し一緒にいたかったな．．．」と思いました。

．．．．．

次に私が彼女を見たときには、今度もまた、宝らしきモノは見当たりませんでした。なぜか彼女はニコニコニコ笑っていました。きっと宝のおかげなのだと、ますます宝が何だったのか気になりましたが、今度もまた、すぐに私にも知ることができました。私がまあるく満ちた日、水がまた彼女のもとを訪れました。彼女は久しぶりに逢った水にとっても嬉しそうに話し始めました。

「風がきたのよ。とても^{ゆかい}愉快的な風だったわ。」

「そう、今度は、風だったんだね。」

「ええ、私ね、最初は不愉快だったのよ。冷たくて吹き荒れてるって思っていたのよ。冷え込んだ夜のせいでね。けれど、風に身を任せてみたら、まあ可笑しくて可笑しくて、大笑いしちゃった。初めの見た目だけで決め付けちゃ駄目ね。ほんとに楽しくて愉快だったわ。次の日の朝、風はお日様の光をあびて、とても暖かくて、優しく私を抱きしめてくれたのよ。その気持ちよさといったら・・・。あなたにも感じてもらいたかった。本当に美しい宝だったのよ。」

楽しそうに話しつつける彼女をみて、宝はとても美しいものだったのだろうと想像はできませんでした。水は彼女の言葉ひとつひとつに嬉しそうにうなずいて聴きいていました。私もそうでした。こんなに楽しそうな表情の彼女をみるのは初めてでしたから、私もなんだか楽しくなりました。

・・・・・・・・

「僕も君に話したいことがあるんだ。あのね・・・」

僕は彼女のもとを離れてからの色々を話した。なかでも彼女が目を見開いて聴き入ってくれたのは、海から空へ昇る話だった。天に帰る瞬間の話だ。

「この前僕は、海がもっとも大きくなれる場所だって話したけど、もっとも小さい自分に戻る場所でもあるんだ。君の目には見えないくらいに、とってもとって小さくなるんだよ。地に生れ落ちる前の自分になるっていうのかな。海までいく前に小さくなることもあるけどね。小さな自分に戻るのね、君が冷たい風を朝になると暖かく感じたのと同じように、僕もあたたかなお日様の光に包まれて、小さな自分に戻って、空に舞い上がるんだよ。そのとき僕も風に抱きしめてもらえるんだ。見えないけれど小さな小さな水の自分があたたかいのか？風があたたかいのか？お日様の光があたたかいのか？分からないけれど、空にまいあがるときは、とても穏やかな気持ちになれるんだ。宝に抱きしめてもらえたときの君の気持ち、少し分かる気がするよ。」

・・・・・・・・

木も水も、お互いの言葉ひとつひとつにうなずき、お互いに幸せを感じあっているかのようでした。木の葉を水は玉となりスルスルと飛び跳ね、二人で笑いあっていました。私はそんな二人を微笑ましく見ていました。

二人でいられる幸せな日々があっという間にすぎ、また離れる日になりました。最後の三つ目の宝のことを気にしながら、私はお休みすることにします。

三つ目の宝

真っ暗な夜でした。水も天に帰ったので、とても静かでした。真っ黒な天を真っ白な星が無数の穴を空けているかのようです。

・・・・・・・・

私はまだかまだか・・と山のほうを見ていました。最後の宝をワクワクして待ちました。蝶も風も、とても美しい宝でしたから、最後の宝に逢えるのが楽しみでたまりませんでした。

けれど、いつまで待っても、山からは何もやってきませんでした。真っ暗な夜のまま、静かな静かな闇の中で、待ちくたびれた私は、いつの間にか眠ってしまいました。

朝になり、お日様の光りが差し込み・・

「おはよう。」の声で私は目を覚ましました。

驚いて、声の主を探しましたが、蝶も風もいませんし、山のほうからも何も来る気配もありません。

「おはよう。アタシはここよ。」また、小さな小さな声が私の足元からしました。

足元には草が生い茂っています。どうやら声はその中からします。よく見ると、草の合間に小さな小さな、ほんっとに小さな白い花が咲いていました。声の主は、この小さな小さな白い花のようでした。

「ここよ、ここ。やっと目があった。アタシは花。あのね、山の神様がね、生まれなさいって言ったのよ。」と、小さな白い花は可愛らしい声で言いました。

「おはよう。ごめんなさい。あんまり小さいものだから、あなたに気づかずに眠ってしまっただわ。」と答えただけれど、白い花はニコニコと「ありがとう。アタシはココに生まれたの。ありがとう。ありがとう・・」と、可愛らしい声でニコニコと見上げてくれるのです。私はその小ささに驚きましたが、その可愛らしい笑みを見ていると、私はだんだん微笑ましくなってきました。お礼をいわれて少し戸惑いましたが、花の笑顔を見ていると私の心は和みました。

一つ目の宝の蝶も、二つ目の宝の風も、山からやってきて、山に帰っていったので、最後の宝のこの花も、山に帰るのかしら・・と、思いましたが、次の日も、花はニコニコと見上げてくれていました。私は一人ぼっちではないのです。彼女がそこにいてくれるだけで明るい気持ちでいられました。

・・・・・・・・

驚きました。私が次に彼女を見たとき、宝が彼女のそばにいたのですから。それは小さな小さな、ほんっとに小さな白い花でした。小さな小さな白い花と一緒にいる彼女はとても幸せそうでした。寂しそうにしていた昔の彼女とは別人のように、本当に幸せそうでした。私がまあるく満ちた日、水がまた彼女のもとを訪れました。彼女は水に小さな白い花を紹介しました。

「この子は花ちゃん。笑顔の素敵な花なのよ。私のところに生まれたのよ。」

「はじめまして。花ちゃん。僕は水だよ。」

「ふふふ・・よろしくね。お水さん。」白い花はニコニコ笑っています。

「本当に美しい宝でしょ。」

「うん。とても可愛いね。」

.....

「僕も君に話したいことがあるんだ。あのね・・・」と、彼女のもとを離れてからの色々を話したかったはずだった。なかでも内側の話がしたかったはずだった。彼女には見えない、地の内側の話をしたかったはずだったのだけど、

「ふふふ・・・あそぼ！」と小さな小さな、ほんつとに小さな白い花に誘われて、僕は話す間もなく、木と小さな小さな白い花と一緒に遊んだ。これまでのように木に僕の色々を話すことができななかったけれど、それでも僕は木と小さな白い花と三人で遊ぶのは楽しかった。僕は、木の枝をスルスルと滑り、白い花にポポポと舞い降り、三人で笑いあった。とても楽しい幸福な時間だった。大好きな木と共に、この花を大好きになれたのだ。大好きな人と共に大切な宝を見守れるというのは、こんなにも幸福なことなのかと実感した。

幸せな日々はあっという間にすぎ、明日は私がお休みをする日です。そう、水が天に帰らなければならない約束の日です。

けれど、水は言いました。「僕は君たちと一緒にいたい。二度も天に帰ったのだし、この花もずっとココにいるのだし。もう、ずっと一緒にいさせてもらえるだろう。」と山の神との約束を破り、天に帰ろうともしませんでした。

木も言いました。「三つの宝はすべて大切にしたのだし、あとは実りを捧げるだけ。もうずっと一緒にいさせてもらえるだろう。」と、水を見送ろうともしませんでした。

私は厚い雲に覆われて、木も水も花も見ることができなくなりました。彼らが山の神との約束を破ってしまっていることで、これからどうなるのかと心配になりながら、眠りにつきました。

次に私が起きたとき、あの☆は厚い雲に覆われていました。雲の向こうから、彼女たちの声だけが聴こえてきました。

「私はね、花ちゃんが大好き。初めは花ちゃんの小ささに驚いたけれど、私は花ちゃんが大好きなの。今ではあなたと同じくらいに、私にとって大きな大きな存在だわ。」

「そうだね。僕もそう感じているよ。花ちゃんは大好きな君と同じように大好きだ。君と一緒に花ちゃんを大切に守れることがとても幸せなんだ。」

「けど・・・花ちゃん、大丈夫かしら？なんだか元気がない気がするの。真っ白だったはずなのに、なんだか黒ずんできているよう。」

「うん・・・どうしたんだろうか？心配だね。」

私はとても心配になりました。花ちゃんの姿が雲で見えないのがもどかしくてたまりませんでした。

それから、あの☆は雲と共に静けさに包まれていました。私は心配でした。どうなるのでしょうか？

「ああ・・・」

それは、水の声でした。

「ああ・・・どうしよう。僕が約束を破ってしまったのがいけなかったんだ。僕が天に帰らなかったから。」

はりつめた絶叫のようでした。

「神様、山の神様、おねがいです。花ちゃんと、彼女を助けてください。どんな罰でも受けますから、お願いします。二人を助けてください。」

すると、雲が輝き始めました。その輝きがこぼれるかのように、雲の隙間から光があちこちに飛び出してきました。眩しい虹色の光が雲を飲み込み、☆が輝きました。

そこには、山の神様と、水、そして、今にも倒れそうなしなだれた木がありました。そして彼女の足元には黒く変わってしまった花ちゃんがありました。

「神様、おねがいです。木と花ちゃんを助けてください。僕が悪いのです。僕がここにすぎってしまったから。本当にごめんなさい。どんな罰でも受けます。どうか許してください。」

「水よ、すぐに天に帰りなさい。そうすることが二人を助けることになるでしょう。あなたも

それは分かっているはずですよ。共にいたいと願うのであれば、共にいすぎてはいけません。けれど、目には見えなくても、あなたと木はいつだって共にいたはずですよ。さあ、天に戻るのです。あとは私に任せなさい。さあ、早くいくのです。」

そうすると、また山の神はとても輝きを増しました。その輝きとともに、水は地へと消えていきました。

「木よ、水はあなたと花を助けるために、ココを離れました。水が去ったことであなたはまた元気を取り戻せるでしょう。」

「ああ、神様、私は彼と花ちゃんと、皆で一緒にいたい。皆で共に笑っていただけなのです。彼がいないのにどうして元気になれるというのですか？」

「木よ、よく感じて御覧なさい。水の一部はあなたの中にあるのですよ。目に見えなくても、ずっとあなたの中には彼がいるのです。よく感じて御覧なさい。」

山の神はそう言いました。

すると、木は涙をこぼしながら言いました。

「神様・・・私は彼と一緒にいたい。」

「ほら、あなたのその涙。それはあなたの内にある水なのです。あなたのその涙も水の一部なのです。水はいつでもあなたの心に生きているのです。」

「ああ・・・神様・・・。ああ・・・水よ、水よ・・・。」

木は涙を流しながら、謝りました。

「神様、本当にごめんなさい。私は約束を破ってしまいました。実りをささげることができないのです。本当にごめんなさい。」

木の足元には、腐った実が落ちていました。

「あなたたち二人が私との約束を破ってしまったことをとても残念に思います。けれど、木よ、安心しなさい。私はもうあなたから実りをいただいたのですよ。」

山の神は優しい声で答えました。

「けれど、神様、私の実はすべて腐ってしまっています。」

「木よ、あなたは私が授けた蝶と風を大切にしてくれましたね。蝶と風は、あなたの花粉をまとして、私のもとに運んでくれたのですよ。ほら、見て御覧なさい。山は実りで満ちているのですよ。山の実はあなたの実りなのですよ。」

山をみると、赤や、黄や、オレンジ・・・、色々な実がなっていました。色とりどりの実で彩られた山は、まるで虹色の山に見えました。

「木よ、あなたはずっとそこから動けないと思っていたようですが、あなたの一部はいつも私と共にあるのです。私はいつもあなたを感じていますよ。」

「神様、・・・けれど、神様の最後の宝物の花ちゃんが・・・花ちゃんが・・・大切に大切にしていたのだけど。元気がないのです。どうか花ちゃんを助けてください。」

「木よ、大丈夫です。安心しなさい。これから白がやってきます。そこから、また色々が生まれるのですよ。春がくれば分かります。」

そうすると、山の神はまた輝きながら消えていきました。けれど、花ちゃんは一言もしゃべりま

せん。山の神は「安心なさい」とは言いましたが、私はとても心配でした。

とても静かな朝でした。澄んだ空気にはりつめた寒さを感じる朝でした。もう何日も真っ白な日が続いていました。空も大地も全てが真っ白におおわれていました。花ちゃんの姿は真っ白な雪に覆われて見えません。

真っ白な中に山だけがぼんやりとうす黒く見えます。うす黒い山を見ながら、・・・いつ春がくるのか、いつ花ちゃんとまた逢えるのか・・・、私はそのことばかり考えていました。

真っ白な天には、真っ白なお日様が白く輝いていました。真っ白な雪が白から白へと舞い降りています。

ちらり ほらり

ちらほらり

冷たく澄んだ空気は真っ白な風をうみ、雪はくるくると踊りながら降りてきます。

はらり ふわり

はらふわり

真っ白な一つ一つは、目の前にフッと現れたかと思うと、くるくると舞い踊り、フッと真っ白な地へと・・・消えていくのでした。一つ一つの真っ白が、一つ一つとくっついて、色々の地を真っ白でおおいつくしていました。

雪の一つが私の頬に触れました。

ひとり ひとり

ひとひとり

私はその雪をなんだか温かく感じました。雪は私の頬で透明な水へと変わりました。

「僕だよ。僕。」

それは、彼の声でした。

「木よ、僕だよ。また逢えたね。ありがとう」

私はあまりにも突然で言葉になりませんでした。まさか真っ白な雪が彼だったとは気づかなかったのです。

「君のぬくもりで、僕はまた僕に変わった。僕は僕でいられるんだ。ありがとう。大好きな木よ。さあ一緒に花ちゃんを助けよう。」

「でも、あれから姿も見えないし、声も聴こえないのよ。大丈夫なのかしら。」

「花ちゃんは大丈夫だよ。花ちゃんの根はとてもしっかりしているから。僕は君のもとを去るとき、地にもぐりこんだろう？花ちゃんは、小さな小さなほんとは小さな花だけれど、根はとて細く長く深く真っ直ぐに伸びていたよ。君の根と同じくらいに、花ちゃんの根はとて真っ直ぐで、しっかりしているんだよ。だから、大丈夫。一緒に花ちゃんを助けよう。春が花ちゃんを助けるんだ。さあ、一緒に春を呼ぼう。」

「ええ・・・」

私は、あまりの嬉しさに涙がこぼれました。私のうちから湧き出た涙と、ひとりの水がくっついて、少し大きな水玉となりました。二人で作った水玉は、私の体をすべり降り、真っ白な大地へと、飛び込みました。

。 。 。 。 。 。

ふたり ふたり

ふたふたり

水玉は白の地へと飛び込み、ぽっかりと穴をあけました。穴からは緑が現れました。緑を水玉で包みこみました。小さな小さな、ほんっとに小さな緑の芽でした。白と黒の二色の世界に、違う色が現れたのです。

すると、真っ白な空は青空に変わり、水玉に包まれている小さな小さな緑の芽に光が差し込みました。それはお日様の黄金の光と・・真っ白なお月様の白銀の光でした。光のぬくもりで、みるみる雪が解け始めました。大地を覆いつくしていた白は解け、透明に変わり、色々が姿を現し始めました。

私の枝葉に乗っていた白たちも、いっせいに透明に変わり、するするとすべりながら、地へと降りていきます。

ぴとん ぴとん

ぴとととと

山の木々もいっせいに雪を雫にかえていました。ぼんやりと黒かった山に、色々の木々が姿を現しました。黄金と白銀、二つの光が辺りを包みこみました。静かだった山の葉は踊り始め、川が走りだし、賑やかな色々の春がやってきたのです。

そのとき、色々の山から虹色の風が吹いてきました。その風には虹色の蝶がのっています。山の神様の宝の、あの蝶と風でした。

「神様に、「春の力を届けてきなさい」って言われたんだ。」

私は二人に逢えるとは思っていなかったので、とても嬉しくなりました。ふたたび逢えた喜びは、私の力となりました。

きらりきらり

きらきらり

虹色の風は、私と小さな緑の芽を包み込みました。すると私と緑の芽の体に虹色の粉が降ってきました。それはとてもとてもあたたかく、やさしく抱きしめられているかのようでした。

ぴかりぴかり

ぴかぴかり

蝶は虹の羽をひらひらさせながら、私と芽にkissをしました。羽から虹色の粉がこぼれてきました。それは甘く、そして苦い薬のようでした。

。 。 。 。 。 。

すると、芽に、虹色のつぼみがついたのです。キラキラ輝く虹色のつぼみはとても美しいものでした。

キラキラキラキラ

虹のきらめきをまといながら、お日様とお月様に見守られながら、花びらがゆっくりとゆっくりと開きました。

「ありがとう。ありがとう。アタシはここよ。ここに生まれたの。ここを生きるの。ありが

とう。」

「花ちゃん・・・。」

小さな小さな、ほんっとに小さな虹色の花は、花ちゃんでした。ニコニコニコニコ笑顔の花ちゃんでした。それはそれは、とても美しい宝でした。

「花ちゃん、よかった。花ちゃん、本当によかった。心配したのよ。もう逢えないかと思ったのよ。ああ、良かった。」

「花ちゃん、また逢えたね。」

「ふふふ・・・アタシね、かくれんぼしてたのよ。みつけてくれて、ありがとう。おかあさん。おとうさん。」

春が花ちゃんを生かしてくれた。いいえ、水や蝶や風、山の神様、みんなが花ちゃんを生かしてくれたのかもしれませんが。お日様とお月様のおかげなのかもしれませんが。花ちゃん自身の力なのかもしれません。分からないけれど、花ちゃんがここに生まれて、ここに生きていることがとても嬉しくてたまりませんでした。

「僕はまた行くよ。そして、また帰ってくるよ。僕が見えなくても、僕はずっと君たちと共にいるからね。蝶や、風にも会えて嬉しいよ。すべてはみんな繋がっているんだよね。目には見えなくても、みんな共にいるんだよ。」

「うん。行ってらっしゃい。気をつけて。」

「うん。気をつけて、行ってきます。」

水はそういうと地の中へと出発しました。すると、虹色の花ちゃんが真っ白な花ちゃんに変わりました。花ちゃんを包んでいた水が虹色の光を反射していたので、花びらが虹色に見えたのでしょう。虹色でも白でも何色でも、花ちゃんは花ちゃんなのです。私は花ちゃんが元気に生きているだけで嬉しいのです。

蝶がいる。風がいる。花ちゃんがいる。私がいる。水も見えないけれど共にいる。共にいれるというのはなんと幸せなことなのでしょう。

蝶は花ちゃんの蜜を吸いました。すると、虹色の蝶はますます輝きを増しました。

風は花ちゃんをくすぐりました。花ちゃんも蝶も私も、風と共に歌い、踊りました。風はますます虹色に輝きを増しました。

私は、蝶と風と花ちゃんが笑いあっている姿をみて、嬉しくなり、また涙がでてきました。その涙はとてもあたたかな涙でした。

「そばにいるんだね。みんな、ずっと共にいるんだね。あなたも。」

そう感じてあたたかくなりました。

すると、

「あっ、幸せ涙だ。」

と、可愛らしい声がしました。蝶と花ちゃんがキラキラ、ニコニコと見上げています。その涙を、あたたかな風がそっと撫でてくれました。お日様の光と、お月様の光のぬくもりが私の心にも春を呼んでくれたかのようでした。

私はずっと見えています。あの山を。山の色々を。

山の神様の宝と共に、ずっと見えています。

私は幸せな木です。

.....

ねえ、お月様。あの☆の瞳は見てくれていますよ。私とあなたのアイを。私とあなたの光を。

ねえ、お月様、私はあなたをアイしています。あなたの大切な宝であるあの☆を私はずっと見えています。大好きなあなたの宝を私も大切に守りたいのです。あなたのおかげで、私がいなくても、あの☆の瞳に私がいることを知ってもらえることができます。

ねえ、お月様。

蝶も風も花も、山の神の宝物です。

水も木も、山の神の宝物なのですよ。

そして、その全てがあの☆の宝物なのですよ。

あの☆は私とあなたの宝物です。あなたの大切な宝物は、私の大切な宝物。大切なあなたの大切な宝を、共に大切にできる自分を、とても大切に感じます。

私はずっと見えています。あの☆を。あの☆の色々を。色々が変わっていく姿をずっと見えています。あの☆は変わっていくけれど、ずっと変わらない。

宝物の☆。

月日とともに・・・。